

浴衣の移り変わり

—文献調査による浴衣着用変化と近年浴衣の変化—

松本 幸子

日本の伝統衣装である和服には夏に着用する浴衣がある。この浴衣について、どのような用途の変化がおり、現在の浴衣として定着してきたかを明らかにする。その結果、浴衣は蒸し風呂などに使用された湯帷子として始まり、合羽・仕事着・芸能、下着、街着等に変化してきていた。現代では、夏のサンドレス感覚で格安の浴衣セットが出回り、若者を中心とした浴衣の流行は、引き続き見出される。また、褌と晴れでは褌の日常着から非日常着の晴れの分類に変化していることが明らかとなり、変化を捉える結果を得た。民族衣装である和服にも用途の変化が見られ、定義も変える時期が来たと考える。

キーワード：浴衣 変化 用途 着用場面

1. はじめに

浴衣の流行が続いている現在、浴衣は、様々な柄・色・染め方・着装の装飾を加えて少しずつ変化している。そのように変化を遂げながら、夏の代表的な和服の浴衣として着用されている。このように、身近な日本の伝統衣装の一つとして、認識されている浴衣の定義としては、「木綿の浴衣地で仕立てた夏の単衣長着のことで、家庭用のもので、原則としては外出には着用しないもので、湯上りのくつろぎ着として用いられることが多いものである。」¹⁾がある。このような浴衣の定義から、その用途の変化を文献資料から明らかにし、さらに現在の浴衣として定着した近年の変化は雑誌より調査し浴衣の現状を明らかにすることを目的とする。

2. 方法

先行研究と様々な資料から浴衣の変遷と用途を調査した。さらに和服雑誌による近年14年間の浴衣の掲載内容を5年毎に調査し変化を分析した。

2-1 文献調査

先行研究として学会誌の清水氏の先行研究²⁾と歴史出版物²⁻⁹⁾を活用して浴衣の用途の変化を調べ検討した。

2-2 雑誌からの傾向調査

近年14年間の変化は、ハースト婦人画報社の『美しいキモノ』2003年から2017年の5年毎と近年の掲載用語・色・柄等から変化を調査した¹⁰⁻¹⁷⁾。

3. 結果

3-1 浴衣の起源

浴衣の原型は、平安時代の湯帷子（ゆかたびら）とされている。內衣布で沐浴や蒸し風呂をするための衣とされている。この時代、複数の人と入浴する機会があったため汗取りと裸体を隠す目的で使用されていた。素材は、水に強く水切れの良い麻が使われていた。安土桃山時代頃からは、湯上りに着て肌の水分を吸い取らせる目的で広く用いられるようになった。江戸時代初期に『日葡辞書』⁶⁾にはYukata、天和から元禄期の西鶴物には「ゆかた」と記されて、元禄期の『女重宝記』⁷⁾に明衣、浴衣を“ゆかた”と呼ばせるなど、江戸

前期の末頃には“ゆかた”の呼び名が広く用いられるようになった。

3-2 用途の移り変わり

湯帷子として、沐浴や蒸し風呂のために使用されることから始まった浴衣は、上流階級で使用されていたものが、風呂や温泉などで使用されるように変化し、一般階級までに広がってきている。その中で、浴衣客や湯女が湯上りに白浴衣、白薄衣浴衣、白地に縁紋模様浴衣をまとう姿が見られるようになり、白を基本とした浴衣にデザイン化の兆しが表れてきたことが見受けられる。江戸時代末期から温泉で“ユカタペー”とよばれる少女で客の浴衣をお風呂から上がるまで預かる役割を務める仕事も出てきている。次に雨衣の役割として使用されたと『寛保延享江府風俗志』⁸⁾に合羽の記載があり、江戸時代の寛保頃迄男子は武家や町人の一部が合羽を用い、他は雨中もそのまま、遠方に出かけるときは木綿単物か湯衣(浴衣)に上帯を締めて出かけている。女子では合羽を着たのは武家の奥方か、主君のそばで仕える近習の者で、半下の者は紋付きの浴衣を着用した。町人女子で木綿の合羽を持つ者は稀であった。江戸時代中期の文化頃でも女子が道中に合羽を着ずに浴衣を着ることは、古風で奥ゆかしいこととされた。中期以降は、木綿の貸し浴衣が現われ、後期にも雨合羽を着る女子は決して多くはなく、長期にわたって木綿浴衣が合羽のかわりに用いられた。合羽と浴衣という着衣の相違は身分や環境の差異を象徴的に示している。

さらに、旅衣としての浴衣が見られる。京都で若い旅行者達が小袖の上に揃いの浴衣を着用した記述が『東海道中膝栗毛』(5編下)⁹⁾に載っている。江戸中・後期には、浴衣は雨天・雪中に限らず、道中の塵除け衣として庶民に広く用いられた。

年中行事に使われている浴衣は、京都では寛文頃から後の盆踊りの前身になった掛踊りに使用され、踊り衣裳には浴衣染が用いられ、更に時代が進むと背中に揃いの紋を入れた浴衣で踊ることもあったとされている。盆踊りの衣は「盆帷子」「盆浴衣」といわれ、江戸時代前期には大切な年中行事のための晴れの衣となったことが分かる。また、

現代でも日常着から、花火大会や催事・祭り等、晴れの非日常で着用するものと変化している。浴衣は、一般労働者の着る被服としても活用されており、江戸時代初めから、末期まで特に往来で汗をかく労働者や水と深く関わり、水に濡れる仕事、野菜や魚売りに始まり、船頭、漁師、海女等労働者・仕事着として広く活用された。さらに江戸時代には、歌舞伎の女形の被り物であったこれまでの手ぬぐいを改め、浴衣を頭から被ったという。それらの浴衣は役者染め・役者柄といわれる新しいデザインであり、当時の一般男女にもその柄が流行した。現代でも団十郎の縞をはじめ、それぞれの役者の浴衣柄が残っている。このような変化をしつつ、家庭着や寝間着へと変わり、現代に近づいてきている。

一方、家庭着や寝間着という用途の概要を見つめる。道中の塵除けに使用されていたことと同じく大掃除の埃よけや、煤払いなどにも使用されている。表着にとどまらず下着としても使用されるようになったのが、室町時代になってからとされている。また、武装の下着に着用されていたり、女子も着物下に浴衣を重ねて着用されていた。江戸時代初期には昼間の小草履取りと言って、15.6歳の美しい少年に、下に絹の小袖、上に唐木綿の袴を着せて、風流な帯をしめ、夏は浴衣染めなどを着て、美しい脇差しをさし、客へ馳走の給仕や、供にも連れて共をさせた者の外出着、または、夕方からの一般女子の外出着とされていた。『守貞漫稿』には1853年には地位や身分の低い卑賤の男子は単衣や帷子の代わりに浴衣を用い、いやしく身分の低い賤婦は外出着に用いたが、一般女子は、普段着に用いても外出着には用いなかったとある。しかし、昼間は憚られる(はばかりられる)が、夜間は外出着として用いていた。

江戸時代になって、庶民に浴衣が普及するようになり、生産の主流が木綿に変わりその生産量も増大した。浴衣といえば晒か真岡木綿に決まっていたようであったが、明治になって外出着にも着用されるようになったことにより、大正中期は、綿縮や綿縹や変わり織りなども出てきている。このような用途の変化と広がりを見せながら、現代の外出着へと変化した。浴衣は、日常的には、洋

装の生活になっている状況であるが、一番身近な伝統衣装の一つと言える。

3-3 雑誌記載内容による近年の浴衣の変化

ハースト婦人画報社の『美しいキモノ』2003年から2017年の5年毎の夏号と近年の2013年から2017年の夏号の浴衣が掲載されているページの割合とそこに載っている用語と浴衣の柄・色について調査した。その結果、浴衣の記載ページは「浴衣」という用語が掲出されているページを換算し、雑誌の総ページ数に対する割合を見た。なお広告を含めていない。閲覧した雑誌の総ページ数は平均すると111ページであった。

2014年は創刊61周年記念年号で特集を組んでいた為特段に54ページと多く、次に2007年と続いている。2012年は震災のあった次の年ということで、自粛傾向であるのか、情報量も少ない年であった。

柄では、夏の季節に着用頻度が増す浴衣という対象であることから、季節の植物の柄がどの年も80%前後を示しており、あまり大きな変化は見られなかった。

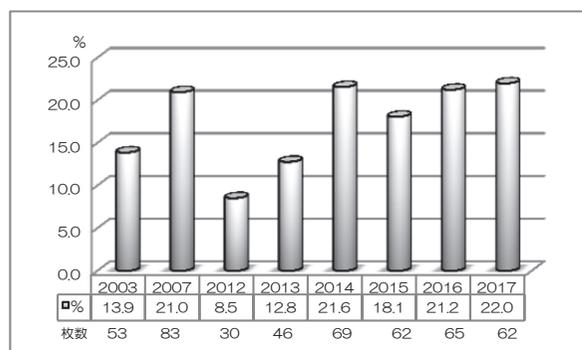


図1 掲載量の割合

次に浴衣をめぐる表現の変化を見ていきたい。14年前の2003年は正統派の浴衣の割合が多く占めている、例えば、「伝統的な麻の葉模様」や「流水、撫子小紋柄」などが見られる。しかしながら、カジュアルな表現も見られた。「カジュアルな中にも可愛らしい柄」、「スイート&カジュアルな浴衣」等である。次に2007年はページ数も他の年

より10ページ前後多く情報量が多い年である。浴衣をお出掛け着や食事会などに着用できるワンランク上の浴衣スタイルとして、高く位置づけた用語が掲載されており、「きもの感覚で楽しむ、上級ラインの絵羽ゆかた」「ドレスアップした街着姿」「粋なニュアンスを加えた大人向きのコーディネート」などが見られた。また、ドレスアップのために染めの袋帯や名古屋帯の意匠化した柄ゆきなど、モダンな両面染め浴衣や大正、昭和の復刻版の柄浴衣が並び、浴衣をカジュアルというよりもお出掛けに来ていくための提案が多く掲載されていた。このように、記載内容から浴衣の用途に対する変化を把握することができよう。それに加えて、金のチェーンやゼブラ柄の帯などの提案もあり、若々しさにも差をつけ、カジュアルにプラスアルファをしていることが読み取れる。2012年は、震災の影響での自粛から品物の説明が中心に記載されており、「古典柄」「懐かしい風景の街並みに似合う古典柄」「正統派」など落ち着いた表現が、最小限に載っている程度である。そして、2013年は、2007年に引き続き、お出掛け着として、格上の名古屋帯や袋帯をポイントにお出掛け着としてのドレスアップしたコーディネート提案している。

用語として、「近年人気な高級浴衣」「染め帯でドレスアップ」「お出掛けしょう青山散歩」「博多帯の八寸帯を合わせてドレスアップ」が見られる。しかし、着用感覚としては、「カジュアルなお出掛け着に」「カラフルな浴衣でお買い物」など気軽に浴衣を着用して欲しいという傾向も見られ、カジュアルと言う用語も残っている。さらに2014年は、また元にもどった用語として、大人と若者が着用する花火大会へのカジュアル浴衣と、大人のための可憐な着こなし等の説明に落ち着いていた。2015年、2016年は「ワンピース感覚」や「可愛らしさ」「キュート」「可憐」など可愛らしさを表現する用語が多く目立ち、大人可愛い等など高級浴衣でも可愛いテーマによる浴衣が多い傾向であった。

2017年も含めて3年間は「カジュアル」という用語は続いており、ワンピース感覚で夏のサンドレスのイメージは消えてはいない。2017年の

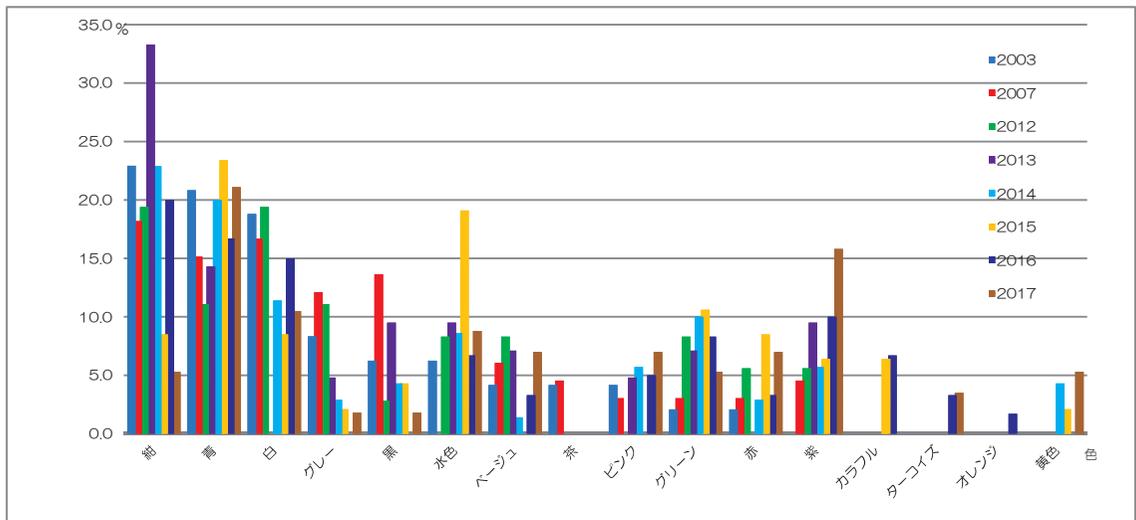


図2 色出現率の変化

特徴は、「伝統的」「正統派」「ハイクラスの浴衣」など古典的なものの中にもモダンな柄や配色を加えた表現が多く見られた。

色合いは、2003年は用語からも分かるように、紺・青・白の色が63%も占めており、落ち着いた色合いが多い年となっていた。2007年も同じように順番は違うが2003年度と同じく紺・白・青に黒を含めて64%を占めて落ち着いた色合いになっている。2012年は10色と色数は少ないが、紺・白は40%を占めているが、ほかのグリーン、水色、ベージュ、赤、紫とあまり多い数ではないが平均的に色が揃っており、割合も3番目からは大きな変化はない結果となっていた。2013年は紺が3分の一を占めており、紺・青・水色・紫・グレー・黒など寒色系の色合いが流行していることが分かった。2013年は色の数は9色と少ない年で、ビビットな色合いは見られず、毎年見られていた白の色がないことはとても大きな変化であると考えられる。2013年の流行色でもあるグリーン系が見られ、ベージュ・ピンク・水色の割合も多くパステルカラー系の色合いが多く、正統派の白紺から離れて、洋服の涼しげなサンドレス的な感覚が出てきていることがわかる。2014年は、白色も出てきており、特に黄色の色も加わり、平均的な色合いにもどってきている結果となっていた。2015年は水色と青の割合が43%と多い。

2016年は平均的な紺・青・白が52%と半分を占めており、特徴は紫の10%である。2017年は、青と紫が多く紫は前年度より5.8%も増え目立った変化があらわれている。

4. 考察

浴衣の用途変化に関する文献調査により、浴衣は、湯帷子から始まり、蒸し風呂や銭湯・温泉に使用され、塵除けや合羽などにも活用されて、また娯楽などの歌舞伎・浄瑠璃の衣装にも活用され、さらに武士の下衣や、寝間着や外出着と浴衣の使用範囲が広がり、現在の祭事中心の着用であるが、役割を得て定着していると言える。

また、雑誌資料による近年における浴衣傾向の調査結果は、以下の通りである。ハースト婦人画報社の『美しいキモノ』を活用して行なった調査によると、近年14年前より和服雑誌2003年から2017年に至るまで、浴衣の柄や色においては、大きな傾向の変化は見られなかった。柄については、和服の基本的な構成として、季節の草木が描かれており、夏の植物類が一番多い割合であり、当然の結果と考える。

色については、多く見られる色は、紺・青・水色・グレー・緑・ベージュ色であった。2003年はピンク・赤が2～3%黒が6%と記載されて、落ち着いた伝統的な色合いの年といえる。2007

年はピンク・赤は3%で黒は14%と黒が8%多いだけであまり変化がなかった。しかし、江戸時代初期から中期にかけて浴衣が庶民に多く着用され始めたころから白または藍染めが好まれたという伝統を受け継ぎ、白と紺系の色合いが多く、2003年と2007年ではあまり特徴的な色合いは見られず、伝統的な正統派の色合いでおさまっている。2012年と2013年では、ピンクが5%で紫が10%と新しい色合いが出てきて、更に白がほとんど見当たらない状況になっている。これは、一時カラフルな色合いが流行った時期が終わり、落ち着いた、浴衣が最初につくられていた、紺系の色合いに流行が回ってきているのではないかと考える。また、白が見当たらないのは、白は透けて着装に配慮が必要であることや、すこし安価に見えることが考えられる。そして、2014年は、白色が平均12.5%のところ11.4%まで持ち直して出てきており、全体に毎年見られる色合いが現れており、平均的な色合いが揃った年と見ることができる。2011年からファッションの流行色にブルーが含まれていることから、近年3年間は青が多く見られており、2015年はその系統の水色が19%と高く伝統色の紺を押えている。しかし2016年は紺が少し復活を見せ20%と増え、2013年に出現している紫が10%も見られ、ここでも配色の繰り返しの変化が見られた。2017年は同様に紫が16%と多くなり、紺が低迷し、5.3%と低く、他の色数が一番多いカラフルな年となっている。

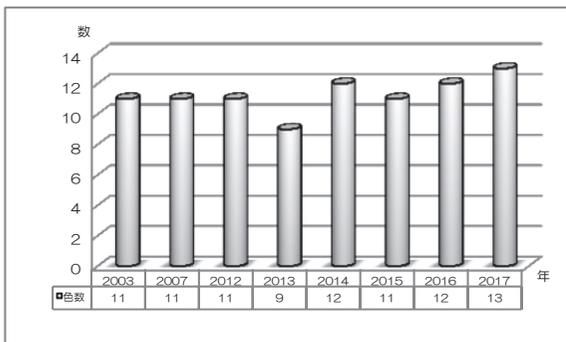


図3 色数出現の変化

次に用語の調査の結果、2003年は、正統派・

浴衣によく見られる撫子の伝統的な柄の割合が多いことから正統派の浴衣スタイルを守りながらも、新しい感覚を取り入れようと、「スイート&カジュアルな浴衣」や「カジュアルの中でも可愛い浴衣」と洋服的な表現を加えながら若い人にアピールしていると考えられる。2007年は情報量が一番多く、カジュアル感覚からオシャレ着感覚を強く表現しており、遊びの他に少し工夫を加えた、ワンランク上の浴衣提案をしている。例えば、絵羽浴衣や両面浴衣、その他小道具の名古屋帯や帯締めをチェーンやゼブラ柄の帯に変えて、きちっとした美しいニュアンスを加えた大人向きのコーディネートなどがたくさん掲載されている。浴衣の使用機会を広げるための食事やお出掛けにも着用できるような提案をして、浴衣の活用範囲を広げる努力が見られる内容になっており、カジュアル的な遊びだけを目的とするものではなくワンランク上の浴衣になってきていると考える。

2012年は、前年の震災の自粛から品物の説明が中心で、「古典柄」「懐かしい風景の街並みに似合う古典柄」「正統派」など落ち着いた表現で、新感覚の姿が消え、守りの表現になり華やかさを控えめにしたと言える。そして、2013年は、元氣や復興なども徐々に回復してきたことから2007年に見られたお出掛け着の提案として、格上の名古屋帯や袋帯をポイントにお出掛け着としてのドレスアップしたコーディネートを提案している。しかし一般的にはお祭りや花火大会に着用する人が多いことから、「カジュアル」と言う言葉も忘れてはいない。新しい感覚としてのワンランク上の浴衣と気軽さとしてのカジュアル浴衣の両面が出てきたと考える。2014年も同様である。近年3年間ではやはり「カジュアル」と「伝統的」の用語どちらも消えることなく続いているが、どちらもそこに“モダン”な配色・柄のデザインが加わり変化している。カジュアルな浴衣から、少し格を上げるために浴衣を着るための道具としての博多八寸帯や伊達衿や下駄・小物の扇子やバッグなども活用して、浴衣のカジュアルな面と少し違うワンランク上のお出掛け浴衣としての用途の広がり意識できる。気分はカジュアルに、形は、いろいろな小物を活用して新しい感覚のワンラン

ク上の浴衣にして、様々な場所にも着用できる浴衣の着装形態が現われてきたと考える。前半、浴衣の歴史でも概観したように、浴衣着用時の用途変化と同様な変化がここにきて起きつつあるのではないかと推測した。

5. おわり

以上の考察により、用途に応じて浴衣の着装形態が変化してきたことが分かった。そして内着から外出着として定着してきたことが、明らかとなっている。その浴衣は、現在ではカジュアルに着用する場面から、新感覚のワンランク上を行くお出掛け着としての浴衣など、着用場面の変化が起きてきている。今までの気軽でカジュアル感覚のサンドレス風浴衣としてのスタイルを残しながら着用の幅が広がったと考える。

このことから、浴衣の定義を考えてみると「簡単な下着に直接着装し、夏の特別な行事やお出掛け着としても着装され、さらに夜の寝巻きとしての活用形態もある幅広い和服である。」以上のように定義を改め、変えるべきである。今回の調査により、浴衣について大きな変化の時期を迎えていると捉えることが出来た。社会環境の変化とともに民族衣装である伝統ある和服も変わる時機を得たのであろう。

引用・参考文献

- 1) 大沼淳：被服文化協会『服装大百科事典』下巻 文化服装学院出版局 PP.464 (1969)
- 2) 清水久美子：「江戸時代における浴衣の用途の広がり」服飾文化学会誌 Vol.5 No.1 PP.61～75 (2004)
- 3) 北村哲郎：『日本服飾小辞典』源流社 PP.94 (1988)
- 4) 喜田川守貞：類聚近世風俗志『守貞謄稿』更生閣書店 PP.427-432 近代デジタルライブラリー - <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1444386/427> (2014.2.22)
- 5) 興津佳平：「和裁の吹きたまり」帝都印刷製本株式会社 PP.275-276、PP.468 (1976)
- 6) 『日葡辞書』岩波書店 PP.833 (1980)
- 7) 『女重宝記下』女性文化研究所 PP.227 (1989)
- 8) 『近世風俗見聞集』第1国書刊行会 近代デジタルライブラリー - <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1750791> (2015.3.18)
- 9) 『東海道中膝栗毛』河出書房新社 PP.62 (2006)
- 10) 『美しいキモノ』7月号 (株) ハースト婦人画報社 PP.228-255 (2003)
- 11) 『美しいキモノ』7月号 (株) ハースト婦人画報社 PP.222-261 (2007)
- 12) 『美しいキモノ』7月号 (株) ハースト婦人画報社 PP.248-264 (2012)
- 13) 『美しいキモノ』7月号 (株) ハースト婦人画報社 PP.234-255 (2013)
- 14) 『美しいキモノ』7月号 (株) ハースト婦人画報社 PP.248-281 (2014)
- 15) 『美しいキモノ』7月号 (株) ハースト婦人画報社 PP.1-25、158-163 (2015)
- 16) 『美しいキモノ』7月号 (株) ハースト婦人画報社 PP.134-135、211-242 (2016)
- 17) 『美しいキモノ』7月号 (株) ハースト婦人画報社 PP.186-221 (2017)
- 18) 一般社団法人日本流行色協会 (JAFCA)：『日本のファッションカラー 100』株式会社ビー・エヌ・エヌ新社 (2014.3)

(受付 2018.3.16 受理 2018.7.6)